

世界民族誌と東北縄文社会の復元

阿子島 香

[東北歴史博物館館長講座概要：歴史博物館グローバル紀行

Part2：モノが語る人類誌]⑦

2025年10月25日

講座要旨

今年度の館長講座は、「歴史博物館グローバル紀行 part 2: モノが語る人類誌」と題しまして、世界各国の博物館を、皆さんとご一緒に巡る旅をしています。考古学と歴史の分野を中心とし、海外のミュージアムを訪ねつつ、世界史の流れを東北地方と関連させて考えてきました。残りあと 2 回となりました。次回は最終回「⑧東北の基層文化論：縄文とエミシ」です。これまでに私が調査研究を行なってきた地域の海外博物館を主にして、人類の歴史すなわち世界史の、さまざまな面に触れてきました。今年も、お話を題材として「東北グローバル考古学」の、全 24 回の内容と関連させつつ、参考しました。旧シリーズは、引き続き東北歴史博物館の HP にて、講座概要（「読む館長講座」）を公開しております。あわせてご参考にしていただければ幸いに存じます。

今年の全体テーマとして「時代区分」ということの意味を考えました。教科書などでは、当たり前のように「原始」「古代」「中世」「近世」「近代」「現代」となっていますが、いったい何がどう変わったのでしょうか。考古学、社会史、経済史、美術史、人物史、また現在の民族誌などの切り口で、それぞれの時代の特徴を探っています。みなさんと一緒に、「学び直しの世界の旅」に出ている気持ちです。

考古学と民族学の融合分野である「民族考古学」(Ethno-archaeology)への大きな批判として、文化人類学により記録された「民族誌的現在」が、どれだけ元来の生活様式の情報を伝えているかという問題があります。また、あくまでも「個別の民族誌」が、人類の文化進化の一般的な傾向をどれだけ反映するものかという疑問も、大きな批判点です。民族考古学の提唱者であるルイス・ビンフォードは、静止した考古学資料から、動態である文化復元に向かうための「ミドルレンジセオリー」を主張して、民族考古学の意義を論じました。いわば全地球の人類の経験の総和として、民族誌の集成から法則性の把握へと向かう「辞書作りにあたる」方向を提起したのでした。

ビンフォードによれば、世界の狩猟採集民の民族誌を集成すると、実際の環境条件と生業経済は非常に多様であるにもかかわらず、大きく二つの類型に大別できます。フォレイジャ一型およびコレクター型と総称する生活様式です（前回講座）。確認しますと、前者は小集

団全体が食料資源の動向に対応して頻繁に滞在地を移動していく型、後者は食料資源の時間的分布（季節）と空間的分布（生息地の多様さ）との間の不均衡を軽減するために、変動する集団編成（離合集散）、季節的な移動と地点回帰、特定資源への集中（集約的なトナカイ狩猟など）、滞在地から特定資源に向けて集団の一部が獲得活動に出る「ロジスティックな方策」、食料の貯蔵行動（端境期の軽減）、保存方策などを組み合わせた、たいへん複雑な生業形態をもつ型です。東北地方では後期旧石器時代後半期になって、真正の石刃技法の発達を伴い、良質の頁岩を保持しながら移動・回帰するコレクター型生活様式の特徴が豊富に表れてきます。一方で、約3万年前までの前半期には、石器集中部が環状に分布する現象、在地性の多様な石材の利用、遺跡構造が反復的であるなど、フォレイジャー型を示唆する現象が目立ちます。

さて、東北地方の縄文社会を考察するにあたって、民族考古学の有効性とはどのようなものでしょうか。参考となるのは、「複雑狩猟採集民」 Complex hunter gatherers としてまとめられる人々です。長期的な定住集落を構成し、大きな社会統合を有し、広い交易圏があり、階層分化も認められるような社会です。講座では、北米の北西海岸、狩猟採集漁撈民の民族誌を考えてみます。太平洋岸のバンクーバー周辺の諸民族です。ハイダ族、トリンギット族、クワキウトル族、海岸セイリッシュ諸族などです。集落には氏族の記念碑であるトーテム・ポールが建立され、秋に河を遡ってくるサケ類の大群を集約的に捕獲し、燻製（くんせい）などの加工処理を施し、保存食料として端境期に備えます。農耕や牧畜は行ないませんが、周囲の環境から安定した食料資源を確保して、複雑で高度な文化を保持してきました。よく知られているのは「ポトラッヂ」という集団的で儀礼的な行動です。しばしば破壊的といえるほどの大量消費を伴って、社会的紐帶や指導者の威信が再生産されます。北西海岸諸族では、狩猟採集漁撈民でありながら「奴隸」が存在した記録があります。

また講座では、海岸セイリッシュ族の長老にして、編籠達人（カゴ類制作名人）のエドさんが東北大学に来訪された折の様子もご紹介します。

縄文文化は、東北地方で大きな繁栄をみました。西日本に比較しての文化の高揚に、その要因として豊富な遡河魚類資源をあげる学説がありました。1960年代に山内清男氏が提唱した学説で「サケ・マス論」といわれ、賛否両方の議論がありました。食料ではトチなど堅果類の高度な利用、クリ林の管理、ダイズ・アズキなどの「縄文農耕」、非常に発達した土器文化、また沿岸部の巨大貝塚、大規模な定住集落、製塩土器、ヒスイ・アスファルトをはじめ広域の物資流通、鼻曲がり仮面などシャーマンの存在、遮光器土偶はじめ複雑な精神文化、高度な植物の編組製品の実際（低湿地遺跡で判明）、洗練されたウルシ工芸の技術など、「複雑狩猟・採集・漁撈・栽培民」としての縄文人の姿は、世界の狩猟採集民の中でも特筆されます。

考古学において、社会組織や観念・思想体系は、復元が困難な分野です。型式学的な縄年研究や道具の技術的分析などに比較して実証が難しい研究といえます。しかし直接的な資料に残りにくい側面も、人びとの生活様式全体としての「統合的文化」の永続には不可欠な

部分でした。民族考古学（民族誌・民俗誌の活用）については、学会でも多様な意見が存在します。館長のように積極的に進めるべきという考え方は、必ずしも日本考古学では多数派とはいえないかった歴史を付記しておきます。

トピックス

以上は、全体の要旨です。以下に、スライドで解説した内容から一部を選んで、項目的に紹介します。

・今回講座の副題は、（フォレイジャー対コレクター学説2および定住狩猟採集漁撈民）としました。前回に引き続いて、現代世界が非常に多様であることを振り返り、民族学が集積してきた「現在の資料」（民族誌）から、原始の時代を考察するという「野心的」な研究動向（民族考古学）を改めてご紹介し、「時代性」「時代区分」とは、いったい何なのだろうかと考えていきます。かつて「未開社会」と言われてきた多くの伝統的文化を保持する社会は、民族学によって研究されてきました。狩猟採集という生業経済を保持してきた多くの文化的民族誌研究から、比較研究によって明らかにされてきた文化の共通性と変異を考えました。そして、同じ狩猟採集という生業経済であった、はるかな太古の「旧石器時代」の文化の性格を、「フォレイジャー型」と「コレクター型」というモデルで考えました（前回）。

・このような研究方向は、アメリカの考古人類学者であったルイス・ビンフォード氏によって、体系化が進められてきました。以前にもご紹介したことですが、館長は、すでに2011年に鬼籍に入られたビンフォード氏に、直接師事することができた唯一の日本人留学生でした。その経験を総合して、『東北歴史博物館研究紀要』（2023、2024）で、東北地方の後期旧石器時代人の文化についての考察を行ないました。なお、当館研究紀要は、どなたも無料でダウンロードできます。今回は、遺跡の事例をあげながら解説しました。東北大学にて私達が調査分析した山形県での「最上川プロジェクト」から、後期旧石器時代前半では、丸森I遺跡、後半では上ミ野A遺跡（石器群A群とB群）、高倉山遺跡、白山B遺跡、白山E遺跡です。また後期旧石器時代前半では、福島県笛山原No.16遺跡、仙台市上ノ原山遺跡下層、秋田県地蔵田遺跡、後半では、仙台市山田上ノ台遺跡（「縄文の森広場」の下層）、上ノ原山遺跡上層があります。これらの遺跡は、以前の講座でも何度か取り上げていますが、今回は「フォレイジャー対コレクター」という人間集団の適応様式という観点からの解説です。遺跡の理解がより深まることを希望します。

・また、縄文文化については、「定住化の進行と確立」という脈絡で考察されて、「北海道・北東北の縄文遺跡群」として整理され、世界遺産に登録されました。世界の民族誌学では、定住狩猟採集漁撈民の文化も、移動する諸民族と並んで研究されてきました。今回は、北アメリカの「北西海岸狩猟採集漁撈民」の事例を紹介して考えてみます。このような分野は、「民族考古学」と呼ばれます。日本の伝統的な考古学では多くの批判も存在する研究方向ですが、逆に未開拓ですから、大きな可能性も存在する分野です（館長の学説です）。

・スライドの写真は、カナダ・クワキウトル族の「話者の杖」を持つ長老です。独自の文字

は持っていました。なおカナダでは、「インディアン」とは言わないで、「最初の人々」(First Nations)と言いますので、注意が必要です。また「エスキモー」とは言わず、カナダでは「イヌイット」と言います。アメリカでは、「インディアン」「ネイティブ・アメリカン」は両方とも使用されています。北米の二国で、先住民に対する言葉に微妙な違いがあります。

・バンクーバー国際空港では、カナダの代表的な先住民アーティストであるスザン・ポイント氏 Susan Point の作品が、ロビーを飾ります（スライド）。「私は、いつも前進することを念じて芸術活動に従事してきました・・・。」とアメリカ自然史博物館（ニューヨーク）HP にもあります。カナダ西海岸（ブリティッシュ・コロンビア州）、アメリカ北西海岸部（ワシントン州、オレゴン州）を中心に栄えた、定住狩猟採集漁撈民の諸族の文化は、現在も重きを置かれています。スザン氏の作品には、祖先から伝えられてきた伝統的なモチーフが、巧みに活かされています。歴史を遡れば、過去の不幸な時代（特に 19 世紀から 20 世紀の半ば）への反省は、両国ともに非常に大きな重みをもって受け止められています。

・館長は、東北大学助手時代からのアメリカ考古学会（SAA）会員で、現在 43 年間の継続会員です。Society for American Archaeology は、北米最大の考古学会です。毎年春 3 月～4 月の年次大会には、約 3000 人が集結します。全米各地を回ります。私はコロナ禍前の 2019 年まで 12 年連続で、研究発表をしていました（東北大学附属図書館 HP にて名誉教授の業績目録公開）。そのうち 2008 年、2016 年の二度の年次大会は、カナダ・バンクーバーでの開催で、その前後に北西海岸先住民文化に触れた経験から今回講座のお話をします。

・スライドは、バンクーバー市内にあるセコイア公園のトーテム・ポール展示です。トーテム・ポールを立てるのは、北米でも北西海岸（太平洋沿岸）の諸部族だけです。現在も作られています。巨大なトーテム。ポールは、森林地帯の環境ですので、針葉樹林からふさわしい大木を選びます。北西海岸地域では、氏族の記念碑として古くからトーテム・ポールを建てる習慣があります。たとえば、儀礼を行う家屋の落成や首長の死、最近では学校の落成のときに、氏族が単位となってトーテム・ポールを作ります。トーテム・ポールに彫刻した動物や人間は、氏族に伝わる祖先神話を主題としたものです。その神話によれば、遠い祖先たちが初めて地上に姿を現したころ、トーテム・ポールに描かれている動物たちと祖先とは、兄弟の関係にあったと伝えています。氏族を象徴する動物は、その氏族の名前として、いまも使われています。トーテム・ポールでは、このような神話の一部が物語りの順序で進み、そこに登場する動物たちを象徴したものです。材質は、アカスギなどの大木が使われます（国立民族学博物館解説 1977）。「氏族」(Clan) とは、祖先をたどる出自集団です。民族によって、父系氏族、母系氏族があります。通常、氏族の内部の人間同士では、婚姻関係を結ぶことは禁じられます（氏族外婚制 Clan exogamy）。

・写真は、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア大学 UBC（バンクーバー）の附属人類学博物館です。先住民文化についての、非常に充実した展示があります。庭園にはトーテム・ポールも見えます。

・ここで先住民アートの例をご紹介します。ワタリカラスは（日本のカラスよりも大形）、トーテム・ポールの主要なモチーフの一つです。神話的な存在であり、トーテム・ポールの最上部にあることが多いです。北西海岸諸族でも、祖先神話は豊富にあります。氏族の由来を伝承する物語の中で、自分たちの位置を再確認します。先住民アートの代表的な例で、ハイダ族の、ビル・リード（Bill Reid）氏の作品です。先住民アートは、カナダでも人気があるので、ギフトカードや、インテリアとしても使われ、広く流通しています。彫刻作品も多いです。お土産店を覗くと、アーティストによる先住民芸術や民芸品、それらの意匠を活かした大量生産グッズなど、たくさん並んでいて、お手頃価格のものも豊富です。南フランス洞窟遺跡についての講座でもお話しましたが、このようなことも、ご当地グルメと同じように、旅行の楽しみです。同時に歴史や文化を学ぶことに通じ、近年我が国政府なども推進している「文化観光」という面もあります。

・こちらは、サケ科の魚です。アートの重要なモチーフです（ビル・リード氏の作品）。美術的な構成と、伝統的なモチーフ、また紋様要素との、絶妙な融合が感じられます。アートを鑑賞しながら、長く深い文化的伝統も堪能できます（個人的な感想）。北米の北西海岸では、秋になると（地域とサケ類の種によって、時期は異なります）サケ類の群れ（おおきく、5種あるとのこと）が、河をさかのぼってきます。サケは、先住民諸族にとって、中心的な食料資源でした。特に、冬から春の端境期（食料資源の枯渇する季節）の保存食料として、不可欠の存在でした。集団で集約的に漁労活動を行なって、大量に捕獲し、そして集落で保存のための加工処理を行ない、長期間生活を支えました。燻製は、最も重要な加工保存法でした。

・サケ漁は、東北縄文の社会にとっても、大きな示唆に富む民族誌です。かつて 1960 年代に、山内清男氏は「サケ・マス論」を展開して、賛否両論の大きな論議がありました。東日本の縄文文化の隆盛に、サケ・マスが果たした役割を論じたのでした。

・ハイダ族の集落の古写真です。撮影は 1878 年とされます。スキディゲート村には、巨大なトーテム・ポールが林立していました。カヌーを巧みに操る人びとでした。この写真の村は、ハイダ族のアーティスト、ビル・リード氏の故郷ということです。

・北西海岸の定住狩猟採集漁撈民の文化と、Complex hunter gatherer fisher（「複雑狩猟採集漁撈民」）概念について整理します。南フロリダ大学ハーバート・マシュナー氏などの研究があります。同氏はニューメキシコ大学卒業、ビンフォードに学びました。私とフランスのドウフォール岩陰遺跡（後期旧石器時代マドレー文化）で、一緒に発掘調査に参加しました。アラスカ大学大学院修了、カリフォルニア大学で学位取得。北西海岸の先史考古学を研究しています。著書に、『複雑狩猟採集民とは何か—アメリカ北西海岸の先史考古学』ケネス・エイムスと共に著。佐々木憲一監訳、設楽博己訳。などがあります。

・複雑狩猟採集民の文化の特徴について、設楽博己氏がまとめています（2022、p.154～）。

1 半定住ないし完全な定住

2 食料の加工と貯蔵を基礎にした経済

- 3 世帯を基礎にした経済
- 4 生業の多角化と集約化
- 5 自然の改変
- 6 技術の複雑化
- 7 人口の多さと人口密度の高さ
- 8 職業の専門化
- 9 複雑な人間関係

10 社会階層化

- ・新進化主義人類学での位置づけを見てみます。「複雑狩猟採集漁撈民」Complex hunter gatherers (fisher を含む)の文化と社会は、首長制段階（類型）の社会とされます。エルマン・サーヴィスにより、ヌートッカ族は、首長制社会（Chiefdom）に分類されています。首長制社会では、社会階層には平等社会を超える組織が存在し、世襲の貴族階層と平民の別があります（マリノフスキイが調査したメラネシアのトロブリアンド島民など）。住民は氏族に分かれて、ランクがあります。生業と定住についてみると、多くは農耕社会が発展した形です。しかし、北米北西海岸諸族は、狩猟採集（獲得経済）であったが、漁撈活動が重要でした。クジラ漁、海獣狩猟などです。サケの資源が特に重要でした。
- ・「ポトラッチ」という文化は、北西海岸の諸族に特徴的で、かなり有名です。これは財物の競争的な消費・破壊を伴う儀礼です。カナダでは、「ポトラッチ禁止令」Potlatch Ban (1884～1951年) が出されて、伝統文化の破壊につながったとされます。政府の強力な「同化政策」による、諸民族の伝統文化の破壊と変容の歴史という、悲劇的な歴史を忘れてはなりません。
- ・北西海岸諸族についての、民族誌的な古写真を多数ご紹介します。エドワード・カーティス・写真コレクションからの画像で、公開されています（スクアミッシュ族歴史協会）。1907～1930年に、Edward S. Curtis は北米のネイティブ・アメリカンに関して、20冊の図書を出版しました。その中に、写真家であったので 2000 枚以上の民族写真が含まれていて、非常に貴重な記録となっています。（クワキウトル族の集会、クテナイ族の男、ヌートッカ族の長老、ハイダ族の長老、スクアミッシュ族の娘、網をあげるカヌー、鈎を準備する男、クジラの解体、弓錐（ゆみきり）で牙の彫刻をするようす、食料保存庫、クワキウトル族のカヌー航海、花嫁を迎えるカヌー、など紹介）。北西海岸諸族の実際の生活のようすが知られます。
- ・ニューヨークにあるアメリカ自然史博物館は、膨大な民族資料を収蔵しています。その中で、植物質材料の編組製品の整理が実施されました。コレクションは、19世紀～20世紀前半を中心に収集されたものが多くあります。収蔵庫写真で見ましたように、それらの機能、製作技術、文化的意味、来歴などは、不明な部分も多いということです。AMNH（同博物館）HP によると、今次の収蔵品整理において、先住民の方に植物質の編組製品について、本来の民族知識を教示していただき、記録することが必須でした。そこで、識者のアドバイ

スなどから、海岸セイリッシュ諸族のうち、エドさんにお願いされたとのこと。カゴ制作の名人として、非常に名高い人物とされます。収蔵品の、この写真のカゴは、特別な材料を吟味し、特殊な編み方をしていて、目が詰んでいる結果、水を入れられる製品。「水も漏らさぬカゴ」です。これに水を汲んで、食品を入れ、焼いた石を内部につるすことで、煮沸されて、食物を調理することができるという優れモノ（エドの談話）。

・エドさんは、海岸セイリッシュ族の長老で、カゴ制作名人としても著名な方です。東北大学考古学研究室を訪問された際の様子をご紹介します。東北大学埋蔵文化財調査室特任准教授の菅野智則さんが、地球研の（当時。総合地球環境学研究所）真貝理香さん（ご専門は動物考古学）によるエドさん、デイルさんたちの招聘事業（アイヌ民族の皆さんとの交流、縄文時代遺跡訪問）の中で、東北大学訪問に協力しました。その縁で、学生諸君に直接お話をされる機会を持つことができました（菅野さん、真貝さんに深く感謝します）。スライドの訪問記事は、Dale Croes and Ed Carriere, *Journal of Northwest Anthropology Memoir 15* で出版のもの。スライドでエドさんが頭に載せたカゴ笠は、特別の意味を有するもので、集団クジラ漁のリーダーだけが着用できます。笠の上部に算盤玉状の突起があります。写真は東北大学学生たちへの、エドさんによる特別講義です。海岸セイリッシュ族の編組製品について解説されました（2016年5月）。大学キャンパスでの植物、スギ類の根などについても教示されました。「民族考古学」教育の実践といえます。カナダから持参された民族資料の編組製品、実物を多数、実際に手に取って解説されました。縄文文化の編組製品への関心を深める機会にもなりました。エドさんとご一緒に活動されているデイル・クロースさんは、米国ワシントン州で教鞭をとられていて、奈文研の松井章さん（故人）と低湿地遺跡の調査をされていました。有名なホコ川（Hoko River）の先史遺跡などの地域です。

・今回の講座では、東北地方において、民族考古学の蓄積された成果（ビンフォード）と、集積している考古学の資料（出土品、報告書）とを、同じ研究の脈絡で合わせて考察していくことの意義を話しました。

・フォレイジャー型の文化適応（東北地方の後期旧石器時代前半）は、約3万年前に、数千年間の適応過程の中で、コレクター型の文化適応へと変化していったという仮説です。石刃技法と広域の移動生活が、計画的に整合していました。その後、縄文時代となって、このコレクター型の文化適応のかたちは、どのように変化していったのでしょうか。定住という生活様式の確立、コレクター型の文化適応にも認められる貯蔵という行動様式、そして社会組織の複雑な仕組みの形成、集団領域の確立など、移動する狩猟採集民の適応とは、また違った文化の様相が登場しました。

・民族考古学の視点では、豊かな環境のもとに安定した生業活動と、文化の複雑さを有する諸民族の事例を、参照枠として、直接には見えにくい縄文社会の復元に向かって、積極的に研究を進める方向が必要であると考えます（館長学説）。

・参照枠として、民族誌的現在の多くの事例の中には、北米の北西海岸の狩猟採集漁撈民があります。そして、これら「複雑狩猟採集漁撈民」Complex hunter gatherer fisher として

まとめられる人々の生活を、考古学の観点から追究していくべきでしょう。縄文晩期の亀ヶ岡文化など縄文文化の実態を、地球的な視点で、再検討すべき研究段階に来ているのではないか。とりわけ旧石器時代における「環境への適応」から、縄文文化における「環境との共生」への文化進化という観点は重要であると考えています。その中で、移動と定住の問題、人間集団による環境への働きかけ（農耕を含めて）、集落の周辺環境との関わりなど、幅広い文化進化の過程が次第に見えてくるのではないだろうか、などと考えているところです。

今回も、ご清聴ありがとうございました。（最後までお読みいただき、ありがとうございました。）

（本稿は、館長講座での配布資料に補足したものです。）